

歳時記のある暮らし

二〇二六年

《十月》

金木犀の芳しい香りとともに、空の青さが澄み清まるころとなりました。皆様、健やかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

十月上旬、日中の暑さは続きつつも、空の色や影の長さに季節の歩みを感じます。八日は「寒露(かんろう)」。朝の草木に宿った露が、ひんやりと輝くころを指します。暦というものは目に見える現象だけでなく、移ろいの気配を教えてくれるものなのでしょう。八日ごろから「鴻雁来(こうがんきたる)」。冬を日本で過ごすために、雁が遠いシベリアの空から渡ってくる時節です。夕暮れどきに空を見上げれば、雁の群れが整然とV字を描いて南へ向かう姿が見られるかもしれません。

十三日ごろからは「菊花開(きくのはなひらく)」。菊人形や菊花展が各地で催され、その凜とした美しさが秋の風物詩となっています。十八日ごろからは「蟋蟀在戸(せせるといり)」。秋の虫が戸口でひそやかに鳴き始め、夜長を涼やかに彩ります。

月の満ち欠けにも、この時季ならではの趣があります。二十三日は「十三夜」。『豆名月』とも呼ばれ、実りの恵みを供えて月を愛でる日本独自の行事です。満ちきらない、わずかに欠けた月に静かに心を安寄せる感覚は、「もののあはれ」というおくゆかしい余韻を育んできました。

日本では古くから、十五夜と十三夜の両方を合わせて観賞することで「調和」と「完全」をなすと考えられてきました。そのため、どちらか一方だけを見る「片月見」は縁起がよくないとされたのです。この「二つをそろえてこそ満ちる」という、感性を美しく昇華させたのが、桂離宮の「月波楼(げいはう)」です。池のほとりに建つこの小さな建物からは、夜空に浮かぶ月と、水面に映る月とを同時に眺めることができます。空と水面、二つの月を一度に味わうという趣向。「月波」という名の通り、波間に揺らぐ月をも景色の一部とするその設えは、完全な満月だけでなく、揺らぎや余白までも愛でる

(裏へ続きます)

『神秘の健康力』

定期購入 30粒 2,700円(税込)～

商品の注文・変更をご希望の場合は、下記にお電話ください。

☎0120-63-2222

※おかけ間違いにご注意ください。

【営業時間】

9:00～18:00 (12/31～1/2は休日)



日本の感性を静かに映し出しています。

昔の宮廷では月を愛でながら和歌や管絃に親しむ風雅な時間が流れる一方、相撲節会や競馬(くらべうま)といった勇ましい行事も神事として執り行われました。江戸時代に入ると勧進相撲が庶民へと広がり、「スポーツの秋へと受け継がれていきます。一九六四年の東京オリンピックが十月十日に開会され、のちに体育の日として定められたことも、秋が運動に適した季節という印象を深めました。

夜が長くなるこの時季は「読書の秋」ともいわれます。中国、唐の詩人、韓愈(かんゆ)の詩に「灯火親しむべし」とあるように、灯りのもとで静かに書物と向き合う時間は、秋の夜長に向いています。また「芸術の秋」という言葉は、大正七年に雑誌『新潮』に掲載された「美術の秋」という表現が源流とされ、のちに広く定着したといわれています。スポーツ、読書、芸術と、秋はこれほどまでに人の営みを豊かに彩る季節なのです。

秋深き隣は何をする人ぞ

松尾芭蕉

晩年、病の床に臥せながら詠まれたこの句は、深まる秋の人恋しさが五・七・五に凝縮されています。長い旅と俳諧の生涯を通じて芭蕉が磨いた眼差しそのものです。

二十三日は「霜降(そうこう)」。北国の山々では霜が降り始め、楓や葛葉が赤や黄に色つき始めます。「楓、葛葉(もみじたきばも)の候を迎え」と、日本各地の山野が錦繡に彩られ、行楽の季節が本格的に始まります。

十月の食卓には、秋の恵みが豊かに並びます。脂の乗った戻り鰯(もどりがいわし)は、炊きたての新米とともに何よりのご馳走です。松茸、ぎんなん、栗、柿と、和の食材が競い合うように実り、食欲の秋を楽しませてくれます。旬のものをいただくことは身体の養生につながります。

健康対策には『神秘の健康力』。商品のご注文やご変更などございましたら、いつでも(0120・63・2222)までご連絡ください。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷直子

